ムービー・エッセイ

これだけは見逃せない邦画・洋画セレクション

ムーランルージュ

渕辺 俊一

舞台は19世紀末。華の都パリ。大きな赤い風車のキャバレー、ムーランルージュでは毎夜、絢爛豪華な饗宴が繰り広げられていた。店のトップスターはダンサーで高級娼婦でもあるサティーン（ニコール・キッドマン）。この妖艶な美女は野心家で、酔客の有り余る賞賛に飽きたらず、女優として表舞台へ躍り出ることを夢見ていた。彼女が女優への踏み台として目を付けたのが、しか女優への野望はどことやら、パトロンの公爵に隠れてクリスチャンと逢瀬を楽しむ仲に。しかし、この公爵もただ者ではなかった。二人の仲を知るや、見かけの派手さの裏で経営難に苦しむ店のオーナー、ジドラーにサティーンを我が物に出来なければ約束の出資を断ると脅す一方、部下にクリスチャンを消すように命ずるのだった…。

私が、この映画を見て強く思ったことが一つある。それは、この映画の脚本家兼監督がある『言葉』を世界の人々の心に深く刻み込みたいという強烈な思いがまず最初にあって、その思いを伝えるのに最もふさわしい方法を固定概念に囚われずに選択したのではないかという事であった。ミュージカルという形式を選んだのも、スピード感ある、どちらかというと単純で分かりやすいストーリーにしたのも、そう仮定すれば、良く理解できる。また、物語は19世紀末の時代設定であるにも関わらず、20世紀後半のスーパースター達の名曲例えばエルトン・ジョンの「ユア・ソング」やビートルズの「愛こそはすべて」などを主演のニコールとユアンに吹き替えなしにメドレー風に絶唱させた奇想天外な試みも、サティーン役に妖しい魅力が売りのニコールを起用し、クリスチャン役に歌唱力抜群のユアンを抜擢した事も、皆、この『言葉』を伝えるためと思えばこれもまた納得がいく。それでは、そこまでして監督が伝えたかった『言葉』とは何だったのか？それは、店のオーナー、ジドラーが人間愛と経営難の狭間で苦悩する我が心を歌う。「…人は何のために生きるのか…誰かその答えを？　…人は何の為に…ショーは続けねばならない　ショーは続けねば…」という問いに答えを与えるかの様に、クリスチャンがくり返し歌う「人が知るこの世で最高の幸せ、それはある人を愛し、その人からも愛されること…人が知るこの世で最高の幸せ、それはある人を愛し、また、その人からも愛されること…」この『言葉』こそが監督が人々に最も伝えたかった事ではないかと私は信じている。そして、私にそう信じ込ますに至ったこの『言葉』の強烈で文句なしのリアリティーと感染力を、この映画で可能にした監督の力量に改めて敬意を表したいと思う。

この映画は２００１年制作のアメリカ映画で、「ロミオとジュリエット」で有名なバズ・ラーマン監督が、脚本から制作まで手がけた渾身の作品。アカデミー賞2部門、ゴールデンクローブ賞三冠達成など数々の賞を獲得。ミュージカル映画としては必見の近年希に見る成功をおさめている。また、ラストで歌われる、この映画の為のオリジナル曲「ｃｏｍｅ　ｗｈａｔ　ｍａｙ」はその至高の映像とあいまって人を感涙滂沱にする。

金力と権力を併せ持つ公爵（リチャード・ロクスポロウ）彼女の虜になった公爵は、彼女の思惑通り女優への道に手を貸すはずだったのだが、ここで大きな誤算が生じる。肝心のサティーンが恋に落ちるのだ。しかも相手は、公爵ではなく純粋で若い貧乏作家のクリスチャン（ユアン・マクレガー）恋は御法度の高級娼婦サティーンもクリスチャンのひたむきな愛にほだされて、いつ